

第4回（仮称）「漱石山房」記念館整備検討会議事 要旨

■ 日時 2012年11月10日（土） 9時30分至12時30分

■ 場所 榎町地域センター多目的ホール

■ 出席者

委員 中島座長、石崎委員、半田委員、山岸委員、牧村委員、沖山委員、
中村委員、夏山委員、貝田委員、志村委員、江木委員、伊藤（聡）委員、
江田委員、小林(浩)委員、小林(智)委員、松林委員、三又委員、
百足山委員、八重樫委員、吉川委員、川嶋委員

事務局等 加賀美地域文化部長、安河内榎町特別出張所長、吉川みどり公園課長、
小俣総務部施設担当副参事、橋本文化観光課長、石塚文化資源係長、
北見主任主事（学芸員）、小泉主任主事、
株式会社丹青社

■ 欠席者 中川副座長、伊藤（幸）委員、田中委員、清水委員、桐生委員

■ 内容

1 開会

中島座長より開会を宣言

2 前回のふりかえりと本日の予定

（1）中島座長より、以下について確認があった。

①前回のふりかえり

②本日の予定について、今後の議論を進めるため旧居の復元手法（展示管理施設内に旧居を一部復元するか、展示管理施設の外に旧居を新築復元するか等）について方向性を決定する必要があること

3 （仮称）「漱石山房」記念館の整備における旧居の復元手法についての区の方針説明

（1）事務局より、資料「（仮称）「漱石山房」記念館の整備における旧居の復元手法について」及び資料「施設整備の基本理念について」に基づき、復元手法に関する区の方針について説明した。

・（検討会のスケジュール・検討の手法について）当初、旧居の復元手法については、事業展開・施設整備の回において、委員の皆様からご意見をいただきながら検討していく予定であったが、旧居の復元手法の方向性が出ないまま、それらの議論に入ると、想定し得るいくつかの復元手法についてそれぞれ事業展開等を検討することになってしまう。

また、この間、区においても、基本理念や類例の記念館の施設見学を踏まえ、大きく2つのパターンのメリット・デメリットの検証を行ったため、それに基づく区の方針をお示しした上で、委員の皆様からご意見をいただくのがベストだという結論に至った。

- ・（基本理念の確認）第2回検討会で示された8つの基本理念の下に、旧居の復元のみには留まらない「文豪・夏目漱石の初の本格的記念施設」の整備を行っていく。
- ・（整備予定地の諸条件について）漱石公園は、都市公園法上の街区公園であり、廃止するには代替地の検討が必要になるとともに、仮に文京区立森鷗外記念館等の規模を想定すると公園を廃止せずとも、同規模の記念館の建設は可能と考えられることから、漱石公園の存続を前提とする。しかし、植栽・外構については、当時の漱石山房の佇まいを再現する工夫ができるよう、一体的に整備していく。また、建築基準法やバリアフリー関連法規については、遵守することが前提となる。
- ・（旧居に関する基礎調査の成果について）旧居に関しては、新たな写真や図面は発見されず、書斎・客間以外の居室の情報は極めて乏しいのが現状である。
- （区の基本方針）展示室等の諸室を備えた記念館を整備し、その内部に書斎・客間を含む旧居の一部を復元する。
- （理由）書斎・客間の2室を中心とした復元については、当時の写真や現存する遺品等一定の資料的裏付けがあるため、ある程度忠実な復元が可能である。また、屋内に展示として再現する場合、様々な展示効果による情景の再現等も可能になると考えている。
しかし、それ以外の家族の居室等については、情報が極めて乏しい中で事実上復元は困難である。
また、屋外に旧居を独立した建築物として新築した場合、継続的なメンテナンスを要するとともに、数十年後には大規模修繕や建替えも想定される。
さらに、バリアフリー関連法規により通路や出入口の幅の確保やスロープの設置等が義務付けられ、当時の旧居の忠実な復元をすることは難しい。

（2）事務局より、「補足資料」を用いて、区の方針についての補足説明を行った。

主に、下記A、B両パターンについて、漱石山房復元の意義・再現性、法令等の課題、見学動線や見学方法の課題、維持管理の課題等の観点からメリット・デメリットについて説明した。

A：展示・管理施設内に旧居を一部復元

メリット（例）：歴史的景観の再現に寄与し、土地の記憶のアピール度が高い。

デメリット（例）：書斎・客間以外の具体的資料がない・新築のため法令上の制限により忠実な復元が難しい・風雨にさらされるため、メンテナンスや経年劣化による大規模改修等の維持経費がかかる。

B：展示管理施設外に旧居を新築復元

メリット（例）：一定の資料的裏付けに基づく復元のため、学術的リスクが少ない。展示効果や手法により、多様で精緻な情景再現や快適に見学するための動線の確保や視線の管理が行える。

デメリット（例）現地の景観としてはRC建築中心となり、土地の記憶のアピール度がやや弱い。

4 質疑応答

・ A、Bそれぞれの建築費用に差があるのか、ある場合はどちらが高いか教えてほしい。

→（事務局）規模によって違うが、建築費、いわゆるイニシャルコストについては、Bの鉄筋コンクリートの大きな建物を作る方が、若干高いことが想定される。しかし、その後の継続的な

メンテナンスや大規模改修、建替え等将来的な負担を含めるとBの方が低くなると考えている。

・今の漱石公園の既存の建物（道草庵）は、そのまま残すのか。

→（事務局）道草庵については、建築後4年目の新しい建物のため、活用する方向でご提案や検討をしていただければと思うが、必ずしも明確な方針は出ていない。

・補足資料の中で、Aは3階建てで、Bは2階建ての階層イメージが掲載されている。建築基準法に制限がないのであれば、3階建てでもいいのではないかと思ったが、何か理由があるか。

→（事務局）イメージ図の延床面積については、森鷗外記念館を想定したもので、例えば、地下階をもう少し広げることは技術的には可能。2階建てに留めているのは、建築基準法上の日影規制の関係がある。

→（中島座長）Aだと3階、Bだと2階建てということではない。今日はあくまで、漱石山房を外に新築するか、記念館の中に復元するかという方針を決めていきたい。

・A、Bどちらがいいかという判断の基準として、もう少し考えてみたいと思って発言する。

Aは、当時の面影、土地の記憶まで含めた歴史的景観を跡地に再現するもので、Bは、漱石山房というものを展示品として考えるものとなっている。

山房の書斎・客間の調度品、文具類、書籍あるいは火鉢とか、そういうものをどの程度忠実に再現するかが判断の前提となる。これがはっきりしないまま造って、中はがらがらということになってしまったらまずい。これは経費を考えても非常に大変なことだと思う。

具体的な質問として、第1に、Bの山房復元の周辺の空間はどのような構造になるのか、元々旧居と庭は一体であったのだが、山房の復元空間と外との連続性はどうか。芭蕉やその他の植栽はどの程度再現できるのか。

第2に、当日の漱石山房は、風雪にさらされ傷んでいたわけだが、傷んだものをエイジング処理によって再現するという意味・意義は。

第3に、「見学の動線と見学の方法」について、「周囲から見学することもできる」というのは、回廊に見学者が立ち入って三方から見るということでよいか。難しいかもしれないが、吹き抜けにして屋根をとっぱらって、上から覗き込むという設計はどうかと思った。

→（事務局）まず1点目の、庭や山房内部をどこまでリアルに詳細に復元するかということ。これについては、昨年度実施した基礎調査により、どんな実物資料がどこにあるかを全国的に調査している。調度品等の大半を所蔵している神奈川近代文学館にご了解を得て、座卓、万年筆、そういった実物についてレプリカを作ることができると考えている。

また東北大学図書館の2,500冊の蔵書については、貴重書のため一度に閲覧できる冊数に制限があり未調査だが、当時の本棚などを再現する場合にはすべての本を調査し、背表紙の写真を撮り、どこにどういう本が配架されていたかいうところまで検討する必要があるかと思う。オープンまで4年あるので、少しずつ詰めて、リアルなものを再現したいと考えている。

それから庭の問題について、展示室内にいわゆる展示物としての植物を書斎・客間の周りに再現することも可能だし、あるいは展示室の外に本物の植物を植え、例えば展示室の壁をガラス張りにすることで、室内室外を一体的に見せるというような展示もできるのではないかと考えている。ただ、植物については、残念ながら木賊、芭蕉、桜等以外は20数種類の植物がどこに植わっていたかということが資料がないため、庭全体の復元については課題が多いと考えている。

2点目のエイジングの問題について、確かにできたての漱石山房を造るというのも1つの考え方である。あるいは、漱石が代表作を執筆したころの山房を再現するのであれば、漱石が入居した時点では建設から10年ないし20年近い年月が経っているため、ある程度のエイジング処理は必要だと思う。ただこれについては、いろいろな考えがあるので、今後の設計段階等でさまざまな検討をしていく必要がある。

それから、三方から見学できるということについて、これはベランダ式回廊からという意味ではなく、ベランダ式回廊のさらに外側から、展示室全体の見学通路から見ていただくという意味。ただ、技術的にベランダ式回廊に上がれるようにすることは可能だと考えている。

5 各委員のご意見（要旨）

- ・歴史的な景観を持つAはすばらしいが、やはり漱石の記念館ということ考えた場合は、山房の復元も1つのファクターではないかと思っているため、Bのほうに傾いている。

1つ質問で、記念館全体としてどうやってお客さまを引きつけるということ考えた場合、もちろん山房復元を見に来る方もいると思うし、皆さまから意見が出ているようにイベントで工夫をするということもあると思うが、展示物に関して新宿区ではどのように考えているのか。というのは、いろいろ方から漱石の原稿等の一次資料はもう集められないということを知っているが、学者の方にして、ファンにして、本物を見たいと思って来る方もいると思う。4年ほどの間に、区はそういったものを何らかの形で収集する取り組みをするのか、「もうそれは無理だ」ということであれば、それに代わる何か魅力的な代替案を持っているのか。最近、神奈川県立近代文学館で漱石の一級品をたくさん持っているが、傷みが激しいので展示会ごとに貸出するのは難しいということを知ったため気がかりである。そのため、この点についてぜひ区の方の考え方を伺えたらと思う。

- ・何となくBを中心に検討する方向に傾いているように思うが、なるほど全体としてAには難しい問題があることも確かかもしれない。ただ、できるならばAのいいところをうまく取り込みながらBを考えられないか。

Bの図は、鉄筋コンクリートで四角い箱を造って、展示室や管理部門、それから漱石山房の復元を入れているが、復元空間はどういうイメージなのか。山王草堂のイメージとBとはかなり違うのではないのか。Bを新宿歴史博物館の地下2階にある文化住宅の再現のようなイメージだと考えると、山王草堂の覆い屋根のイメージとはまったく違う。古色蒼然としたいかにも再現しましたというものができただろうが、行ってみようという魅力があるとは思えない。

Bの外観はどのようなものか。書斎と庭の植栽の連動性がどうなっているのか、どこまで自然の植栽が内側に入り込めるのか。新宿歴史博物館の地下のようなやり方だと、ビニールの植栽仕立てのものを並べるようにしかならない。

それから、山王草堂は鉄骨パネル構造になっているため、残念ながら外と内との関連がなくなってしまっている。もうちょっとオープンにできないだろうか。復元空間の書斎の東側と南側の部分は、パティオのようにして外気が入るような形がいいのではないか。そうすれば、漱石が回廊の藤椅子でゆったりしていた雰囲気がある程度再現できるのではないか。緊急のときには、上からスクリーンを下すようにしておけばよい。RCの四角い箱を作って、その中に復元というのであれば、下手をすると新宿歴史博物館の文化住宅の再現になってしまう。それだ

けは避けたいと思う。

それから、記念館の屋根がどうなっているのか。この図だといわゆる陸屋根になっているよう。山王草堂の場合には瓦で比較的建物が低かったので、玄関の部分は外と内とが連動していたため、当時の山王草堂の雰囲気は多少外観から感じられる。もし覆い屋根とするならば、どういう覆い屋根をするつもりなのか、その辺りを検討していただきたいと思う。

- Bでいけたらいいと考えている。その理由は、Aはどうしても先々にかかるコストが高くなってしまい、Bよりも柔軟性が低くなってしまおうと思う。こうやって集まってきている私たちもさまざまな意見があるが、そういった意見を取り込みやすいのがBのほうだと考えている。

もう一つ、提案というか要望で、全8回のうち残り4回ということで、私たちもいろいろな意見を抱えているので、それを発表できる回がいつなのか、スケジュールの詳細や検討会当日以外に意見を述べられる機会等をアナウンスしてほしい。

- メリット、デメリットを考えればどうしてもBになるのだと思う。Bの建築は味気ないという話があったが、優れた建築家はたくさんいるので、その建物自体に魅力がある建築にしていけばよい。その際に、耐震の関係もあるが、解放感や復元空間と前栽を含めた庭との一体感など、外から建物を見ても引きつけられるような工夫を考えることで、新宿区にある漱石山房記念館そのものが非常に魅力のある建物として残り、それによって建物を見学したいという人も集まって来る。漱石山房の復元だけではなく記念館の建築そのもので引きつける、そういった設計・建築を考えていけばよいのではないか。それを前提にBにすればいいのではないかと思う。
- 皆さんのお話を聞いて、Aにも良さがあるということは十分分かったが、Bのイメージに賛成したい。

記念館ができた暁には団体客等がいらっしゃることも想定され、見学者の動線が非常にポイントになると思う。この点から考えると、独立した別棟の家屋を見学者がぐるっと取り囲んで見るよりは、建物の中で、雨にも風にも雪にも強いというほうがいいと思う。

最近ではITの活用ということもあるので、漱石の電子書籍を展示の中に組み込む等ということも建物の中でできれば大変うれしいと思う。

- Bについて、造り物を閉じ込めてしまうとは良くないのではと気にされているご意見が出ているが、建物の中に住居の復元をする展示というのはあちこちにある。ただ、大体どれも外光をすべて遮断してしまって、照明で陰影を演出するようなかたちになっている。もしできれば、ここには新しいタイプの屋内における再現展示ができれば面白いと思う。例えば植栽は人工の植栽がかなり発達しているようなので、そういうもので庭の再現がどの程度できるのか。それから、復元の部分を吹き抜けにした場合、その上に広い空間ができると思うので、そこをどう処理するか。あるいは屋根を取ってしまって、上のほうの階層から覗きこめるようなことも可能だろうし、資料の劣化を考えると難しいかもしれないが、思い切って外光を入れるということも、可能性としてあるのかもしれない。

B案であれば、いろいろな演出構成が検討されることを非常に楽しみにしている。

- 土地の記憶とか、庭の面影というものがあるが、「庭の面影や土地の記憶を可視化すること」＝「リアルな再現」ということだろうか。リアルさという言葉が重要。リアルさを追求することが庭の面影や土地の記憶を伝えることになるかということについては、少し疑問に思う。

その前に、公園・庭も含めて、まず基本的に美しいものを造らないといけない。そうでないとせつかくの記憶も語り継がれることがない。

A、Bは迷っているが、庭の面影を内と外と分けることなくシームレスに発信できるものがよい。そして、美しいものを作るためにある程度設計費用も見込んで、そもそも美しく、そして建物、外構、植栽が一体としたものを作りたいと思う。

- AとBを比べると、メンテナンスやバリアフリーの面から考えて、Bのほうがよいと思う。

Aだと別棟に入る際に靴を履き替え、傘を畳んでなどしなければならない。特に荷物が多い女性は、靴を脱ぐのも大変なこともあるので、Bのほうが集中してゆっくり見られると思う。また、階層はだ決まっていないということだが、3階まで上がるよりは、2階建てでワンフロアを広めに取ったほうが動線的には高齢者にもよいと思う。

エイジングの件で、わざわざぼろぼろのものを造ることはないという意見があったが、外側は近代的なきれいなビルで、中に入ったときにエイジングを施した漱石山房があると、インパクトがあると思う。「漱石の家はこういう家だったんだ」ということを、来る人も期待すると思う、Bであれば、外気にさらされることもなく、長い間温存できるので、エイジングをするのはとてもいいと思う。

- Aは、結局建物としては2棟できることになる。図書館の仕事をしているため、施設管理が業務の中に占める割合というのがとても大きいことが分かる。大規模修繕をして数年しかたっていない中でも日々いろいろなところが劣化するため、メンテナンスにとっても苦勞している。何年もたった後というよりも、1年1年、毎日毎日、そういったことが発生していくので、そのことを考えるとAというのは、施設外部のところに非常に力を取られてしまうのではないかと思う。やはりBにして、記念館本来の部分に力を集約するほうが良いのではないか。

建物の形などについては、まだ全く決まっていないので、逆にここは皆さんのいろんな意見を取り入れながら、よりいいものを造る余地があるし、夢をいろいろ膨らませる余地もあると思う。山房の復元が屋内にあるのは少し不安だということは、まだ考えなくてもいいのかなと思う。

九州にある松本清張記念館に行ったことがあるが、そこも外側は普通の建物で、中に玄関から応接間と書斎を復元していて、1階は普通の展示があり、2階に上っていくと見学通路から中が全部見えるようになっている。吹き抜けでもないし外から全然見えないが、そういう形もあるので、Bのほうが夢が広がるのではないか。

- 新宿区にある3つの施設、林芙美子記念館、新宿歴史博物館、佐伯祐三アトリエ記念館でボランティアのガイドをしている。

新宿区がこれらの施設を造るときに、その時代、その目的において最高のものを考え、生み出したと思う。だから、ガイドをする中で、来館者が帰るまでに、どれだけそこでいろんなことを体験し、あるいは感じてもらえるかをいつも楽しみにして、自分がしゃべるより相手にしゃべってもらえるように努めている。

そういう経験から、AとBを見たときに、Aのほうが優れていると思う。でも、結論から言うと、Bにしたい。というのは、補足資料に書かれていることとは別の観点から言うと、Aはスペースの無駄遣いをしている。そんなに無尽蔵にあるスペースではないところに、2つの建物を置くということは無駄になる。Bは、現状を維持しながら、このスペース、この目的を考え、

コンパクトに組み合わせてある。そういう中で来館者のお相手する場合に、Bのほうがやりい
いなと思う。来館者が満足をされるようなガイドができそうな感じがする。結論としては、Bに
賛成する。

- ・結論としてはBが現実的ではないかなと思う。私も林芙美子記念館で長くガイドをしたり、佐
伯祐三アトリエ記念館の新しい建物を拝見したりしているが、この漱石の記念館、漱石山房が
その中でもメインのものとなると思う。

文京区立森鷗外記念館の新しい立派な建物を見て、これだけのものがここにあると思うと、余
計にファイトがわいてきたような気がする。

現実的にはやはりBのメンテナンス可能で、長く継続できる、そしていろいろな対応ができる
点で、Bがよいと思う。

将来さまざまな展示を考えられると思うが、例えば、少し暗いところで集中して展示をご覧に
なれば、次に漱石山房の復元空間に出たときの、外光や広がりなどに対する効果的な驚きが得
られる。できる限り忠実に復元していれば、そういう驚きが得られ、素晴らしい展示が可能だ
と思う。イメージとして似通った感じを思い出すのが、規模も内容も違うが、ニューヨークの
メトロポリタン美術館のエジプトの展示の外側にあるエジプト神殿のような吹き抜けの部分
で、そこに行くといつもほっとする、すてきな場所だった記憶がある。

この記念館では、ガラスをふんだんに使って、山房復元の周りを歩けるように、そして天井を
取る、または、一部屋根を残して開口にすることで、部屋の中を上からものぞけるなど、いろ
いろの方法があると思う。暗いところと明るいところの対比的な驚きなど、そんな工夫でもす
てきなものができるとは思わないかと思った。

- ・漱石山房の復元という考え方だと、アピール性があるAだと思う。でも、これから新宿区の財
政がもっとひっ迫することを考えると、例えばその時に復元旧居が壊れてしまって、修復にす
ごくお金がかかったら、すぐは対応できないと思う。そうしたら、初めからBにして、室内に
展示という形で、書斎と客間等を復元すればいいのではないか。

ほかのところも全部詳細が分かるのであれば、無理してでもAだが、客間、書斎だけしか分か
らない状況で、そんなに無理することはない。また、多額のメンテナンス経費がかからないB
案に賛成する。

江戸東京博物館などでも、いろいろ工夫して、納得できる展示をしている。それから、上から
復元展示を見下ろせるというのも1つの案ではないかなと思う。また、常にいろいろな催しを
やることで、人集めは成功する。熱心な方は何度もご覧になるが、何もやらないとどんなに素
晴らしい記念館でも、一般の人はそれほどお見えにならないと思う。だから、皆さんの心を動
かすような展示や催し、研究会等を工夫して、人寄せをすると成功するのではないかなと思っ
ている。

- ・確認したいのだが、周囲の土地の構造として、弁天町から漱石山房通りに入って抜けるまで、
ちょうど一層ぐらゐの高さがある。漱石山房通りはそのぐらゐの坂道になる。そこで、東側に
基準を置くのか、西に基準を置くのかということを確認したい。

AかBかどちらかと言われると、Bになる。漱石公園の周辺は住宅地でビルはほとんどない。
周りの景観との兼ね合いということから、地元の間人としては2階建てのB案のほうが、すっ
きりするのではないかなと思う。そういうことでB案を推したいと思う。

→ (事務局) 図面を持ち合わせていないため、今は現地の詳細が不明。設計段階のことまでは今回の検討事項に入らないが、次回までに、少なくとも現状どようになっているか確認してお答えしたい。

・区営住宅跡地も含めて全体を整備するという考えに立って、Aの図面にある漱石山房をもう少し記念館の中に入れるなりして、記念館の何階かから山房の全体が見えるような観覧席のようなものを造ればいいのか。周りの植栽等は、明治期の雰囲気が出るようにして、山房の周りも含めてその時代の雰囲気を出す。記念館には人力車が置いてあるということもあるかもしれないし、そうすればかなり変わってくるのではないかと思う。

・Bのほうが適当ではないかと思う。

一番大きな理由は、実物の資料がほとんどない状態で、原寸大の建物を造ることにどれほどの意味があるかということを見ると、Bのほうがいいのではないかということ。例えば、推定の縮尺模型を記念館の中に置くなど、そういう形が好ましいと思う。

今日は、原寸大の建物を復元するか、あるいは一部を復元するかを選択ということでA、Bを選ぶということなので、おそらく屋根をどうするかというような具体的な設計はこれから決めることなので、この辺については今深く追究しなくてもいいと思っている。

それから、エイジングの話があったが、これについては中にある展示物と建物の外観のバランスが取ればいいのかとあって、外がピカピカで中のものが古くてもおかしいという意味でのエイジングは必要ではないのかなと思っている。

・AかBというと、Bに賛成する。というのは、見学者の立場から考えると、階層が高い建物というのは、例えばエレベーターがあっても、自分が踏み入れたときにいい思いをしなかったもので、階層の低いほうがよいと思う。また、見学者としては、やはり2棟に分かれるより1棟のほうが、動線の観点から良い。

Bの展示室内に植栽を入れるということについては、天井から自然光を取り入れることは難しく、いろいろな制約もあるので、メインの植栽を何カ所か入れるくらいでよいと思う。20数種の植物があったということなので、それを建物の外側に植えて、こんなものが植えられていた、という庭を作ってほしいと思う。

また、記念館の中は、二間と玄関をなるべく忠実に復元してほしいと思う。実物が少ないということだが、レプリカを制作できるという話があったので、実際に本物があっても手に取って見られるわけではないから、なるべくレプリカ等を製作して忠実に復元してもらいたいと思っている。

(休憩)

6 学識経験者のコメント

・約100年前の漱石山房とその周辺を復元し、そしてミュージアム的な記念館、あるいは公園施設をそこに組み込んでいくという、これは前代未聞な試みだと思う。いろいろな映像あるいは実際に記念館等を見てきたが、こういう形のものほとんどないのではないか。それだけに新宿区の熱意に協力していきたいと思っている。

この敷地面積の有効利用ということと、漱石山房を復元したときの維持管理、それから建築基準法、バリアフリーのことなどさまざまな観点から見て、Bに傾いている。

ただ、こういう記念館を訪ねるときに、やはり目玉は、山房がどのような形だったのか、そこで漱石が小説や書画を書いた、そういう空間とは一体どんなものなのかということだと思う。一門下生として、漱石山房を尋ねてみたと思像する、例えばこの美しい蔦に囲まれた玄関のボタンを押す、そのこと自体にわくわくする、そういう感動というのはBでは難しいかもしれない。

それから、芥川の記事をはじめ、いろいろな文献を通して、山房の佇まいについての記録が残っている。だから、行ってみて「なんだこれは」というのは避けたい。漱石は、日本でもまれに見る文人趣味の強い人だった。その面影が断ち切られてしまっていると、漱石研究者から不満や非難が出ると思う。

次に、展示する実物資料が少ないということ。おそらくこれについては、記念館ができ、予算を取ってアピールしていけば、自然に集まってくると思う。私は50年ほど漱石研究をやってきていて、かなり漱石文献は持っている。いわゆる書画とかそういうものではなくて、研究書とか雑誌とかそういうもの。本当にいいものができたら、そういうものも全部収めてもいいなという気もする。あまり心配しなくとも、こういうものができるそれをサポートする人たちが必ず出てくるし、良いものに育っていくのではないか。そういうことを頭の中に入れた設計にしていかなければいけないのではないかとも思う。

建築基準法とかバリアフリーの問題とか、法令上のことを考慮するとBだが、Bの中でも「土地の記憶」や景観、それから文人漱石を伝えるようなものを考え、可能性を追及し、クリアしていくという、その努力を私たちはしなければいけないと思う。

- 皆様のご意見、私自身の仕事でも参考になるご意見が多くて、考えさせられた。最初にご発言があった復元の対象にする漱石山房を展示資料として捉えるのか、あるいはこの漱石ゆかりの地に漱石の情報センター的なものを整備していくということのシンボリックな建築物なのかというのは、非常に大きな分かれ目だと思う。

最初にこのプランの説明を聞き、基本理念を拝見したときに思い描いた理想的な姿というのは、どちらかというとAに近い。「こういうのがあったらいいな」というイメージは、どちらかというとAだが、その後報告書を読み、何回かの検討会で討議を聞いた中で、現実的にはBだろうと思っている。

しかしながら、方法はBであっても、これから設計に入っていく段階でいくつかの大きな課題があるかと思う。

そもそも全体復元をするに足る建築的な資料は皆無に等しいわけだから、山房を建築物として復元するというのは、基本的には無理だろう。そうしたときに、書斎・客間の二間を中心に漱石がそこで執筆をし、文人としての活動をしたという「空気」のようなものを、来館者にどう伝えるのかということが非常に重要だと思う。先の発言にもあったが、室内に作られた復元空間であっても、そういう空気感を演出するというのが非常に大事になってくるのではないか。

その時に1つポイントとなるのは、皆様のご意見にも出ていたが、公園部分と、箱の中の復元空間のつながりをどう作るのかということだと思う。

ただ、一般的に考えるとガラス張りの部屋を造るというのは、エネルギー効率も非常に悪いし、まして天気の良い日は解放しようということも考えると、資料を展示する空間は復元空間には作らないというぐらいの割り切りが必要になってくるだろう。

もう一つ、屋根の話も出たが、屋根の忠実な復元も非常に難しいことを考えてみると、上からのぞける構造というのは検討に値するポイントだと思う。

バリアフリーについては、どちらかという法律に対応していくためにどうすればいいのかという受け身的なニュアンスを受けた。しかし、むしろ新しく造る施設としては、きちんとユニバーサルデザインを最初の理念の中から入れて、博物館の展示を目で見るということだけではなくて、触れるものとか、目でご不自由な方がそれなりに楽しめる、耳でご不自由な方も、漱石に触れることができるというような仕掛けを、基本的な方針の中に積極的に取り組んでいくんだという考え方の整理をした方がいいのではないかと。言ってみれば、「五感を使って漱石を楽しめる場」を求めるという方法が望ましいのではないかと思う。

結論はBだが、課題も多い。オープン時点でできあがりという解釈ではなく、理想的な漱石の情報センターを目指すのであれば、オープン時点を例えば3合目であるとし、頂を目指すための中長期的な展望の中で、現状の課題がどれだけ解決できたのか、今後どういう施策が必要とされているのかを冷静に見極めながら、把握していくがとても大事だと思う。

オープン後も課題を整理し、きちんとそれに対応していくという前提の上で、方向としてはBというふうに感じている。

- ・私も皆さんとだいたいポイントは同じ。現実的にはBしかないだろうと思っている。さまざまな条件や、それから図面も残っていないということ。そもそも家族が居住した部分を復元することによってどれほど意味があるかという問題もあるので、Bのほうが現実的だと思う。

ただ、とりわけ室内での建物の復元というのは、精巧に作れば作るほど、作りもの見えてくるというか、エイジングをしてもいかにもわざとらしく見える。これは根本的な問題でやむを得ないのだが、その違和感をどうやって少しでも解消していくか。

このB案で、一番皆さんも指摘されているポイント、復元空間や覆いの部分、植栽はどうか。要望としては、暗い閉じられた感じではなくて、やはり屋根の工夫等により、外光や空気など、外との関係を重視してほしいと思う。

漱石は日なたぼっこが好きで回廊に座ってお茶をあおりながら、原稿を書いていたのだが、そういう彼の人の柄が出るようなものにしたい。復元空間を、明るく閉そく感のないようにできるかが工夫のしどころ。それを大きな課題として要望したい。

- ・きょうの検討会のテーマは、旧居の復元ということなので、建物の復元をするということについては話をさせていただく。

建物の調査に年に何回か行くが、その調査項目の中に必ず「復元」というものが入ってくる。建物を使っている間には、使い勝手がいいように改修をするので、大体は当初の姿でない。そのために調査項目になる。当初のものを復元するというのが復元の普通の状況。100%かつての姿が分かることはなかなかない。

分からない部分をどういうふうに復元するかというと、証拠を集める。その証拠というのは、断片的なので、断片的な証拠の間の空白を埋める作業が必要になってくる。

直接的な資料として、例えば写真や図面があれば楽だが、たいがいそういうものはないので、状況的な証拠から判断するしかない。例えば、類型を探すとか、隣の建物がどういうものか、時代的に材料あるいは工法がどういうものが使われているかということをお案して、総合的に復元する。だから、復元という作業はどうしても、主観的な判断が入らざるを得ない。10人

復元する人がいれば10通り復元案ができるというようなこともあり得る。

しかし、単に空想で復元するというのではなくて、過程でどれだけ学術的・理論的に復元できるかということが重要になってくる。その過程の中で得られた新しい発見等が、仮に復元に反映されなくても今後何らかの役に立つこともあるだろうし、そういうことにも復元の学術的意義ということがある。復元をすれば批判はある意味当然だし、リスクもある。その上で、どれだけ分かったか、あるいは分からなかったかということをはっきりさせた上で、復元するというのが学術的には大切なことなのではないかと思う。

今回は、夏目漱石の住んでいた「漱石山房」を復元するというのに、単に建物復元ではないプラスアルファの要素が入ってくる。まず、復元する人が漱石の人となりやイメージをどうイメージして、それを投影して、見る人に感じ取ってもらえるかというような要素が必要になる。そこに、私が経験している復元とは違った要素があると思う。

・ 中川副座長のメッセージ（読み上げ事務局）

「(仮称)「漱石山房」記念館の整備における旧居の復元手法について

かつての「漱石山房」の全貌がかの地に復原の上、再建されることを委員の一人として願っておりました。しかし、漱石山房の全貌はもとより、客間、書齋、ベランダの細部でさえも、いまだ、詳細については詰められていないところがあり、これまでの研究成果を冷静に振り返ってみれば、学術的に証拠をあげて、正確な復原案を作製することは、不可能といわざるをえません。

しかし、これまでの、その復原を目指した調査研究の成果は膨大かつ貴重なものであり、これらの研究資料を散逸させることなく、保存展示することは、調査に協力して下さった全国の方々や、多勢の漱石ファンおよび日本近代文学の発展のためにぜひとも実現すべきことと思えます。

また、一部確定できない点があるとはいえ、書齋、客間、ベランダ、および背景の庭園の一部はほぼ研究成果を究めたものであり、この様相を復元的に展示することは、極めて意義のあることと考え、是非実現してほしいと考えております。よろしくご検討いただきたくお願い申し上げます。」

7 6を踏まえての質疑応答

- ・ (中島座長) Bといっても、具体的に図面が引かれているわけではない。図面が実際に引かれ始めるのは何年度になるか。

→今後の予定について、第5回(12月16日)は事業展開等について、ご意見・ご提案をいただく予定。その際は、少グループに分かれて、自由なご提案等をいただきたいと思います。

また、第6回には、この事業展開を実現するに当たって必要となる設備や機能、その配置等について、こちらもグループに分かれてご意見・ご提案等をいただきたいと思います。それを第7回、8回につなげ、3月に最終的に確定し、報告としてまとめたいと考えている。

それに基づいて、区で基本計画を策定する予定。設計については、平成26年度以降の予定。

→ (中島座長) 実際に細かい図面が引かれるのは少し先になる。例えば、こういう場所にこういうものが欲しいという要望を出すことはできる。

Bの図面は最終案ではない。施設内に復元するということの1つのイメージとして描かれていると理解してほしい。

- ・図面を引く人は決定しているのか。いわゆるゼネコン的なところなのか、それとも、もっとデザイン性や外と内との一体感、あるいは山房の見せ方等を重要視し、想像力豊かな建築家の方が加わるというような、お金を惜しまない形で建てようと考えているのか。

→建築家や専門の設計者から提案を受けて、比較検討しながらやるプロポーザル方式、あるいは特定の専門家をお願いをして設計をしてもらうというやり方もある。また一方では、単純に入札というパターンもある。どのやり方がいいか、十分に検討したい。

この事業に関しては、建物が完成して終わりということではないので、単に費用の面だけではなく、その後の事業展開にとっても非常に大切だということを肝に銘じ、設計等につきましても、慎重に、皆さまからのご意見等も伺いながらと考えていきたい。

→(中島座長) 鷗外記念館を見ると、区が活動するところというふうになる、というのがよく分かる。ぜひ鷗外記念館は見た上で、色々ご判断いただきたいと思う。

- ・漱石を語るときに、1つの切り口として、奥さまの存在というのが大きいと思っているが、台所などが皆様の検討の中には入っていないようだ。木曜会のメンバーは奥さまの手料理を楽しみにしていた、こういったことも展開できたらまた新たな方向性になるとうこともあるのでは。そういう考え方や切り口をそぎ落としていいのか、教えていただきたい。

→(中島座長) 家族のことはもちろん非常に大事だし、調査もされている。例えば展示の場合は、漱石の家族というテーマも当然出てくるので、そうすると鏡子さんというのも大きい。

森鷗外記念館にいくと、鷗外の子供たちをクローズアップしている。展示には絶対そういうアングルは落とせない。それから、あまり話題に出ていないが、木曜会に集ったお弟子さんたちのことは非常に重要でどうしても落とせない。鷗外記念館の場合は、観潮楼の歌会に来た人の文学者にウェイトを置いて展示している。そういうことは私たちにとっても当然あり得る。

ただ、問題は奥様がいた台所の復元は、現実的に資料がないので難しい。鏡子夫人や弟子たちのことをクローズアップすることは非常に大事なこと。居間のところに箆笥があって、箆笥のどこそこに通帳があるということは、修善寺の大患の時代に奥さんがご自宅のお弟子さんに宛てた手紙の中で分かっている。しかし、どういう箆笥があったかという点についての写真や資料がないので、復元ということはなかなか難しい。

→例えば、漱石山房に電気を引いたのは明治42年だったが、それは鏡子夫人が、漱石がいない間に勝手に電気をつけた。でも、漱石も帰ってきたてみたら「すごく明るくていいな」という話だったらしい。それから、山房というのは、下から冷気が上がってくるので非常に寒かった。ガスストーブを引いたのが、確か大正3年ぐらいだが、最初から近代的なものを完備していたわけではなくて、徐々に徐々に整備されていった。都心部は早く都市ガスが引かれていたが、早稲田南町の辺りは遅い。電気にしてもそう。例えば「門」という小説で、宗助と御米は、ランプで生活している。一般的に明治末年まで郊外はランプ生活だった。照明器具やランプ器具まで含めて、当時の生活の面影というものを復元できれば、それはそれでまた面白いし、そういう資料は、新宿歴史博物館などにもあるのではないかと思う。

- ・外から見える部分に、芭蕉などの植栽や回廊を設置して、籐椅子を置き、そこに皆さんが自由に登れるという、そんなものができたらいいと思う。つまり、外から漱石の記念館というのが

ひと目で分かるような、何かそんなことができないかなと思う。

漱石が好んだ食べ物、例えば、チョコレートとかカレーライスとか、そういうものから漱石の人柄が伺えるし、とても親しみやすく、大人だけではなく、子供たちの目も引くのではないかなと思う。

・資料があまりないという点について、実際に資料をお持ちというお話や将来的には学術的な資料なども徐々に集まってくるのではないかというお話を聞いてほっとした。

森鷗外記念では、展示ケースの中にきれいな初版本などが並んでいた。そういうものも揃えていくのだろうと思うが、新宿区としては『道草』以外に今、どのような初版本なり資料を持っているのか。今はなくても、資料収集に関する計画をしていただきたいと思う。

→（事務局）漱石の初版本は所蔵していない。その他に『道草』の草稿、それから書簡・書画等が若干あるが、それぐらいである。漱石の一次資料については、昨年度の報告書にできる限りまとめたが、すでに収まるべきところに収まっているものと、それからまだ所在の分からないもの、新たに発見されるもの多少あるので、区としては、それらに関心を払い、注視していきたいと思う。そして、限られた予算の中で、効果的なものをできれば収集していきたい。初版本ぐらいは何とか手に入れたいたいという希望はある。

→（中島座長）この会で、やはり生々しい現物の展示が必要だと要望すれば、当然、区のほうも考えるということはあると思う。机等の現物は難しいが、本だったらまだ可能性がある。

来月の検討会から、事業展開に入っていく。今までも皆様から意見が出ていて、記録は取っているが、それ以外にも、こんなことを考えているとかこんなことをぜひ実現したいということ一度集約できればいいと思っている。

簡単なメモ、個条書きでいいので、事業の展開としてこういうことを、そのためにはこういう施設が欲しいという少し具体的なことを、来月集まる前に集約できているといいのではないかな。あとで、スケジュール的なアナウンスが事務局からある。

8 整備の方向性の確認と本日のまとめ

（中島座長）A、Bとあるが、少なくともAは難しいということ、これはもうやむを得ない。

復元の範囲について、漱石山房の復元ができたらいという気持ちは持っているが、法的諸条件や管理の問題がある。また、学術的にも100%復元が難しいのだったら、書斎と居間、できれば、その次の玄関のところまでは何とかしたい。

そして、Aのように屋外に独立して建築するのは現実的には難しい。それよりも中に復元して、スペースを確保した上で、事業展開をするほうが、将来にとってはいいことではないか。

そのところを、今日は方向性として確認したい。Bと言っても、例えば階層をどうするか、吹き抜けなのか屋根をどうするのか、あるいは外壁をガラスにするのか、こういうことはこれからのアイデア次第で、いろいろと意見も出てくると思う。

例えば、今日の発言の中で「佇まい」という言葉が出てきた。それから漱石の活動の「空気」、漱石の「人となり」、こういう部分が一番大事になる。文人漱石、偉い作家というだけではなく、その活動の空気が分かるような、そして五感をもって体験できる、漱石の人となり分かる、親しみやすい施設にしたい。こういう曖昧な言い方をして、あるいは設計の人が汲み取るのは難しいかもしれない。だから、方向としてそれが一番大事なのだということ、私たちが漱石の愛好

家として持ち、それをどう形にするかが要求される。

設計する人、図面を引く人にも漱石の作品、例えば「硝子戸の中」を読んでほしい。その姿勢だけは忘れないでいたいと思う。

植栽や外構、屋根のことなどに展開していったとき、私だったら、漱石が座っていた場所に座ってみたいので、その可能性をあきらめていない。天井はスライド式にして、あるときには、天井がなくて、あるときには上からのぞけるように、などいろんな夢が出てくる。また、漱石が居るつもりで、その机の前のところに座り、芥川の気持ちになってみたい。そうするとやはり書斎の一部までは入りたい。それはまだ不可能ではないので、今後考える価値がある。

Aではないということは認めざるを得ないが、Bでもまたいろんなプランがあり得るので、この図面が決定と思わないで、アイデアを出していただきたい。Bの中で限りなくAのいいところを生かしていきたい。Bの可能性を追求する。それを一応の結論にしたい。

9 次回の告知・連絡事項

事務局より、以下の確認及び連絡を行った。

- ・第3回検討会議事要旨については、訂正があれば、11月20日（火）までに事務局にご連絡いただきたい。
- ・次回第5回は、12月16日（日）午前9時30分から、会場は榎町地域センター多目的ホールを予定している。
- ・第6回は1月19日（土）午前9時30分から同多目的ホール、第7回は2月16日（土）午前9時30分から新宿歴史博物館を予定している。第8回については現在調整中である。
- ・第5回、6回については、小人数で意見交換ができるようなグループ討議を予定している。次回は事業展開がテーマになるので、すでにご意見・ご提案をお持ちの方は、今月中にメモ・箇条書きで良いので、事務局までファクスまたは郵送でお送りいただきたい。
- ・本日の施設見学会（自由参加）では文京区立森鷗外記念館、台東区池波正太郎記念文庫を見学する。